

「観光の研究と実務に役立つ図書館」を目指して

本号では、移転に向けて現在準備を進めている「旅の図書館」のリニューアル後のコンセプトや特徴についてご紹介します。

観光の研究と実務に役立つ図書館へ

移転後の「旅の図書館」では、これまで収蔵してきた旅行・観光に関する各種図書に加えて新たに、当財団の調査研究部門が活動の中で収集してきた統計や調査研究報告書などを公開いたします。これに伴い、蔵書規模は3万5千冊から6万冊へと大幅に増加します。

また、これまで以上に研究部門と連携した運営を行い、「観光の研究と実務に役立つ図書館」を目指します。観光を研究されている方・学んでいる方、観光政策の立案、観光産業

の経営や実務に携わっている方、あるいは広く観光に関する動向に興味をお持ちの方のご利用を想定し、さまざまな文献から研究の種々を、多くの参考事例から観光政策や観光地づくりの現場に活かすヒントを探すために、足を運びたくなる魅力的な図書館にしたいと考えています。

以下に、特徴の3つを取り上げます。

特徴① 旅行・観光分野の専門図書が6万冊

当館は、旅行・観光に関する図書資料を専門的に収蔵してきた我が国でも数少ない専門図書館です。このたびの移転、蔵書数拡大を機に当館独自の分類に取り組み、新たに観光分野における詳細分類を確立しました。目的の図書・資料をより探しやすくする工夫を検討しています。

専門的な資料のお問い合わせ（レファレンス）や各種相談には、調査研究部門とも連携しながら研究員が対応いたします。

特徴② 古い文献や経年変化も調べられる豊富な資料や統計

当館では、旅行・観光に関する各種図書の他、時刻表、国内外の機内誌やガイドブック、旅行関連雑誌などのバックナンバーや、戦前からの国内外の旅行・観光に関する貴重な資料（古書、稀観書、『旅』『ツーリスト』のデジタルアーカイブ）などを所蔵しています（写真）。時代をさかのぼった研究やバックナンバーを利用した経年調査も可能です。



外国人向けの日本案内ガイド（1926）、雑誌『旅』戦前の終刊号（1943）や海外旅行ガイドブック（1952）



旅行意識や観光事業などに関する各種資料

特徴③ つながる―学び合う

―交流機会の創出

「図書空間でつなぐ&楽しむ研究交流」を合言葉に、ゲストスピーカーと参加者が気軽に語り合える場として2014年度(平成26年度)にスタートした「たびとしょCafe」も開催6回を数え、定着してきました。今後も「たびとしょCafe」を継続的に開催する他、書架に隣接したホールや会議室での研究会やシンポジウムなど、図書のある空間の魅力を活かし、観光の研究や実務に携わる皆様が気軽に集まり交流できる機会をご提供します。

新たな「旅の図書館」は、より専門的な蔵書を拡充して研究者・実務者の皆様に大いにご利用いただくとともに、さまざまな交流の場となるような図書館を目指し、準備を進めています。どうぞご期待ください。詳細は、今後も本誌や当財団ホームページなどでご案内いたします。
(旅の図書館長 久保田美穂子)

所蔵図書紹介

『震災と芸能―地域再生の原動力』

(橋本裕之著、追手門学院大学出版会)

東日本大震災直後から時間の経過とともに風景が徐々に変化する中で、人々がコミュニティとつながっていたいという思いが「復元力」となり、地域を再生する「原動力」になっていることを、本書は教えてくれる。筆者が研究者として何ができるか、何をすべきなのかを自問し葛藤する中で、行動を起こしていたことを披瀝しているくぐりには興味深い。「私はようやく気付いた。生活再建や地域再建ができてから民俗芸能なのではなく、生活再建や地域再建のために欠かせないアイテムこそが民俗芸能だったのである」。自身が実践的な活動を通して、個別的体験を一般的な経験に昇華させて復興支援の一助として活用する方法として認識したことは印象的である。岩手県沿岸の津波被災地域においては、人と人、集落と集落とをつなぐ神楽や虎舞などの民俗芸能の場を共有することが、前に踏み出す気持ちは被災者に醸成している。それを実現させようとする地道な支援活動に敬服する。未曾有の大災害からの復興に、一体何が底力となり得るのかを考えさせられる一冊である。



四六判 272ページ
定価 1,600円
追手門学院大学出版会
(2015年3月発行)

『温泉の平和と戦争―東西温泉文化の深層』

(石川理夫著、彩流社)

温泉にまつわる書籍はどれほどの数が出版されていることだろう。温泉が湧く地域は観光地となり、老若男女が訪れて賑わい、のんびりと過ごすのがごく一般的な情景である。ところが、本書の表紙タイトルを見て驚いた。温泉、平和、戦争？何が書かれているのか。欧州で戦争状態にある中で協定を結んで、中立地としての「温泉地」は敵同士が傷を癒やし、静養する避難所と取り決めた平和の場であった。日本の戦国武士の間でも同様なことがあったという。温泉が湧く所は「聖域」という考え方が世界で共通する。その「聖域」に逃れている間は罪人であっても捕らえられないといった決まり事もあった。平和な時も戦争の時にも温泉が人々から別な世界としての存在と意識され、争い事から隔離されていた。「平和と戦争の問題は、過去のものでは決していないことを今日痛感させられる。平和な癒しの避難所(アジール)としての役割を担ってきた温泉(地)の、温泉の平和に思いを馳せていただければと願う」。との筆者の強い思いに共感する。(片桐)



四六判 238ページ
定価 2,000円
彩流社
(2015年11月発行)